

写真発見をきっかけに、 深まりつつあるオタイ(Otai)研究

因為發現照片 而逐漸深入的オタイ(Otai)研究

山本芳美 都留文科大学比較文化学科講師

呂青華 翻譯

私が「オタイ」を知ったのは、森田峰子さんを通してであった。森田峰子さんとの出会いは全くの偶然であった。事のおこりは、2005年10月に出版した拙著『イレズミの世界』（河出書房新社）に、カメラマンの森田一郎さんが手紙を寄せてくださったことにある。森田さんは1966年に『刺青（いれずみ）』という写真集を編まれており、日本の刺青の紹介者としては嚆矢の存在である。「イレズミに関する資料が多少ありますから、一度遊びにいらっしやい」と気さくに声をかけていただき、ご自宅にうかがうことになった。森田さんから写真の撮影法などのお話をうかがっているところに、「妻です」と紹介されたのが、森田峰子さんであった。

譯 我是經由森田峰子女士才知道有「オタイ」的。而與森田峰子女士認識也純屬偶然。事情發生在2005年10月拙著《刺青的世界》（『イレズミの世界』河出書房新社）出版時，攝影師森田一郎交給我一封信。森田先生在1996年編著了一本《刺青》的寫真集，可說是日本介紹刺青的嚆矢。他曾平易近人地對我說：「我有一些關於刺青的資料，歡迎你來看看」，於是前去他府上拜訪。當我正在問森田先生有關照片拍攝法的當兒，他向我介紹森田峰子說：「這是內人」。

森田ご夫妻は民間の写真研究者であり、日本の公共施設以外では最も写真を所蔵する「森田写真歴史資料室」を主宰されている。峰子さんには台湾に関するご著書『中橋和泉町松崎晋二写真場』があるとのことで、早速入手して読み出した。『中橋和泉町松崎晋二写真場』は、ご専門である日本の近代写真史の視点から、初期の写真家群像を紹介する構成をとっている。

題名になっている松崎晋二は、1874（明治7）年の「征台の役」に日本発の従軍カメラマンとして参加した人物で、戦況を綴った『台湾日誌』を残していた。『台湾日誌』に基づき、松崎の資料と彼が撮影した写真を探すなかで、峰子さんはオタイの写真を発見する。写真研究のため20年前に入手した北白川宮能久が所蔵していたアルバムに、オタイの写真が貼りこまれていたのである。北白川宮能久は1895（明治28）年に近衛師団長として赴いた台南でマラリアにかかって没していることから、台湾との密接なつながりを想起させる。北白川宮のアルバム写真の多くは進呈されたり、買い集められたりしたものであったが、なぜ1枚だけオタイの写真があったのかは不明である。

譯 森田夫妻は民間写真研究者、主持一間日本的公共設施之外、藏有大量相片的「森田寫真歷史資料室」。峰子女士與台灣相關的著書有《中橋和泉町松崎晋二照片地點》，我立即買來閱讀一番。《中橋和泉町松崎晋二照片地點》是峰子女士從他日本近代寫真史的專業角度來介紹初期的寫真家群像。書名標題的松崎晋二是以日本從軍攝影師身分參加1874（明治7）年「征台之役」，身後留有敘述戰況的《台灣日誌》一書。峰子女士以《台灣日誌》為基礎，在蒐羅松崎的資料和他拍攝的相片時，發現了オタイ的照片。為了照片研究之故，20年前購得北白川宮能久所收藏的相簿，其中貼有オタイ的照片。北白川宮能久在1895（明治28）年以近衛師團長身分赴台南就任，因瘧疾身歿，不禁令人聯想到他與台灣密切的關係。北白川宮的相簿照片有些是他人贈送的，有些是購得的，但為什麼會有一張オタイ的照片，原因則不明。

松崎晋二が撮影したと確定できた征台の役の写真は、現在のところ、オタイの写真1枚のみである。日誌や残された公文書から、松崎が撮った写真は複数あり、そのうち数枚は宮中で天覧に処されたということがわかっているのだが、残りの写真はいまだ不明である。写真のオタイは、ブレないように誰かの手で頭を押さえられ、大きな手に熊手を握っている。当時の主流であった湿版写真の露出は、10秒間身動きしないことが求められていた。突然攻め込まれた日本人の男たちに囲まれ、動揺している彼女に撮影を理解させるのは困難であっただろう。オタイは、二つの玉がついた耳飾りをつけ、腕輪をしている。服は筒袖で、首からわきの下に向けて、切り替えしがついているのがパイワンらしい。布を頭に巻きつけ、丸顔で目と眉の間がせまっている。目はレンズに向けられることはなく、不安そうな表情である。写真の裏には、「明治7年6月3日台湾蕃地爾乃社 人家焼却ノ節 途中に立居シ小女（ママ）」と書かれていた。6月10日には、日本に向かう船に乗せられたオタイが、元の場所に帰されたのは11月27日である。

譯 由松崎晉二所拍攝的、而且可以確定是征台之役的照片，截至目前為止也只有オタイ這一張而已。日誌和遺留下來的公文書中有松崎所拍攝的照片數張，其中幾張可以辨認出是在宮中天皇御前，其餘則至今不明。照片裡的オタイ，被一個擔心鏡頭晃動的人用手壓著頭，大大的手裡握著一把耙子。當時主流的溼版照片的曝光需要身體不動10秒鐘。被突然闖進來的日本男人包圍而晃動的オタイ，要理解這照相原理恐怕很難吧。オタイ帶著兩顆圓珠串成的耳飾和手環，穿的是筒袖衣，從頸部到腋下反摺，看似排灣。頭上纏著布，圓圓的臉，眉目之間細窄。眼睛沒向著鏡頭，表情略顯不安。照片的背後寫著「明治7年6月3日台灣蕃地爾乃社 人家失火時 站在路上的小女孩（ママ）」。6月10日搭上開往日本船班的オタイ，11月27日回到原來的所在。

峰子さんの本を読み、お話をうかがったのは、ちょうど私が台湾に行く直前であった。2000年から2年半ほど台湾・中央研究院民族学研究所に訪問學員として留学していたのだが、山梨県の公立大学の職を得てから、年に一度、5日間程度しか訪れることができなかった。珍しく2週間の滞在がかなった2006年3月、まだ台湾を訪れたことがない峰子さんのお手伝いできれば、と私は昨年12月に新装開館なった国立中央図書館台湾分館にて資料や写真をさがしはじめた。すると、征台の役の資料群からオタイの名が散見できた。これに力を得て、林修澈先生と黄智慧先生から紹介されたvaljlukさんに、牡丹社近辺を案内していただいた。valjlukさんからは、この20年家族ぐるみで続けられてきたオタイや牡丹社事件についての聞き取り調査についてもうかがった。感銘を受けたのは、valjlukさんの「部落の声で部落の歴史を書く」という姿勢や牡丹社事件をめぐる学術交流活動の活発さであった。

譯 閱讀峰子的書，詢問相關問題的時間，正是我要出發到台灣的前一天。從2000年開始，筆者以訪問學人的身分在台灣中央研究院民族學研究所留學2年半左右。在謀得山梨縣公立大學的教職之後，就只能一年訪台一次而且僅待5天左右。2006年3月好不容易可以停留兩週，心想，說不定可以幫不曾來過台灣的峰子一點忙，於是到去年12月剛開館的國立中央圖書館台灣分館著手尋找資料和照片。結果在征台之役的資料堆裡，找到一些オタイ的名字。由此我找到動力，透過林修澈老師和黃智慧老師的介紹，認識了valjluk，他帶我到牡丹社附近踏查。同時我也訪談valjluk先生，詢問這20年來オタイ全家的情形和牡丹社事件的狀況。令人感銘肺腑的是，valjluk先生「用部落的聲音，寫部落的歷史」的態度和牡丹社事件學術交流活動的頻繁。

帰国後、国立公文書館のアジア資料センター (<http://www.jacar.go.jp/>) においてweb上でデジタル公開されている資料を検索したところ『処蕃類纂』や『処蕃始末』に、およそ40から50のオタイに関連する記述があることがわかった。『処蕃類纂』や『処蕃始末』は、蕃地事務局

が作成した報告書である。オタイの処遇や帰還に関して、蕃地事務局とオタイを世話した大倉喜八郎や上田發太郎が頻繁にやりとりを交わしている。ここから推察するに、大倉喜八郎や上田發太郎の日記、当時の新聞記事など、念入りに探せばかなりの資料があるはずである。峰子さんも、今回の調査のお土産として渡した台湾の図書館や資料館に所蔵されている書籍やマイクロ資料目録から、直接確認したほうがよい資料や写真集を見つけ出したという。

譯 回國後，檢索國立公文書館亞細亞資料中心（<http://www.jacar.go.jp/>）網站上公開的電子資料，我發現《処蕃類纂》、《処蕃始末》中大約有40~50條與オタイ有關的記載。《処蕃類纂》、《処蕃始末》是蕃地事務局製作的報告書。有關オタイ的遭遇和還鄉問題，照顧オタイ的大倉喜八郎、上田發太郎和蕃地事務局有頻繁的往來。由此推判，如果仔細尋找，應該可以從大倉喜八郎、上田發太郎的日記及當時的報紙找到大量資料。峰子女士也說，從我這次調查回來帶給她的伴手禮—台灣的圖書館資料館所藏的書籍和微捲資料目録—他找出需要直接確認的資料和寫真集。

研究はまだこれからだが、写真を思い浮かべながら資料を読み込んでいるうちに、だんだん自分のなかでオタイ像が明確になってくるのを感じる。資料が語るところによれば、オタイは台湾から長崎に向かう船中ですでに病気にかかり、日本郵船会社については見物人に囲まれて泣いていたという。異郷で心寂しくふるえる12歳の少女の姿が、無味乾燥な文字の間から浮かび上がってくるのである。valjlukさんやパイワンの皆さん、森田さん、私などの台湾と日本の研究者たちが協力しあい、オタイが短い生涯をどのようにすごしたのかを明かしていく。その作業が終わったとき、オタイは本当に故郷に帰ることになるのだろう。

譯 研究現在才正要開始，一面回想著照片，一面讀著資料，漸漸地感覺到オタイ的形象在自己的腦海裡越來越清晰。資料顯示，オタイ在從台灣開往長崎的船上就已經生病，到達日本郵船會社時，因為被遊客包圍而痛哭。身在異鄉，心感寂寞而顫抖的12歲少女的模樣，從枯燥無味的字裡行間逐漸浮現。valjluk先生、排灣族的族人們、森田先生、我們這些台灣與日本的研究者應該攜手合作，共同把オタイ如何度過他短暫生涯呈現出來。當這個工作完成時，才是オタイ真正回到故鄉的時候。

相關文獻

森田一朗1966 『刺青（いれずみ）』（刺青），図譜新社

森田峰子2002 『中橋和泉町松崎晋二写真場——お雇い写真師、戦争・探偵・博覧会をゆく』

（中橋和泉町松崎晋二照片地點—受僱攝影師，前進戦争・偵探・博覧會），朝日新聞社